『曽我物語』の虎御前と雨

――「虎が雨」の生成に関する一考察――

新村衣里子

はじめに

建久四（一一九三）年五月二十八日、源頼朝が主催した富士の裾野での巻狩の期間中のことである。この日の夜に、曽我十郎祐成と五郎時致が父親の敵を討つという事件が起きた。この後、十郎は討死し、五郎は捕らえられて処刑される。若くして横死した二人は畏れられ、御霊神として崇められることになる。この事件の経緯を題材としたのが『曽我物語』である。真名本と仮名本の二系統に大別され、真名本が古態を示すとされる。(1)

物語において曽我兄弟の死後を弔う役割を担うのが、大磯の遊女として知られた虎御前である。虎は十郎の恋人であり、事前に敵討の趣意を打ち明けられた唯一の女性であった。

季語として知られる「虎が雨」とは、曽我兄弟の敵討が行われた陰暦五月二十八日に降る雨を指し、「虎が涙」や「虎が涙雨」とも称される。一般的には、恋人の十郎の死を悼む虎御前が流す涙だと捉えられている。

従来の研究で主に田植の行事や御霊信仰との関連から指摘されてきた「虎が雨」について、本稿では、平安時代以降の文学作品にみられる「雨が降る時期に流される涙」の伝統が下地にあることを確認し、さらに動物の「虎」と雨との密接な関係性が「虎が雨」という概念の生成に影響を与えた可能性について考察する。

一　重なり合う、雨と涙

古典文学の世界において、涙を雨と同一視するといった発想は少なくない。波多野真理子氏が、「和歌や連歌の世界においては、『涙も雨も』『雨も涙も』『ともにしぐるる』といった表現が特に珍しいものではなかった」ようだと指摘するように、涙は雨と強く結びついていた。(2)

ここで注目したいのは、季節的な雨によそえられる涙である。和歌などに詠まれていたような「五月雨の時期に流される涙」という発想が、のちに五月二十八日の曽我兄弟敵討事件にまつわる虎御前の涙を想起させるものとして機能していくと考えられるからである。

五月雨の頃に流される涙として平安期の作品で想起されるのは、例えば『和泉式部日記』(3)である。宮から送られた、「おほかたにさ

みだるるとや思ふらむ君恋ひわたる今日のながめを」という歌に詠み込まれた五月雨は、心象風景を効果的に表している。五月雨に「乱れる」という意が含まれることは先学によって指摘されているが、ここでも、心が乱れて物思いをする涙の雨が長雨となっているというように解釈される。

中世においても『新古今和歌集』[4]の「五月雨の空だに澄める月影に涙の雨は晴るる間もなし」（雑歌上・一四九一・赤染衛門）のように、五月雨の季節と涙とが結びつく例がみられる。同様に、「五月雨はまやの軒端の雨そそぎあまりなるまで濡るる袖かな」（雑歌上・一四九二・藤原俊成）も、五月雨が涙の比喩となっている。

真名本『曽我物語』（以下、真名本と称す）における曽我十郎と虎御前の最後の別れの場面でも、「比は建久四年癸丑の五月下旬の事ナレは、五月雨の天ラの物憂キ今朝の空ラシモ、五月雨茂ク雨連ヒテ、不三晴一レ遣心の暗ミ、裾スは露、袖は捶ツ、涙に、无カリける由契哉」（巻六）と、五月雨について強調することで、涙に暮れる二人の姿を印象づけている。

また富士の裾野へ向かう曽我兄弟が鞠児河（鞠子河とも・酒匂川のこと）を渡る際にも、五月雨と涙を関連づけた描写がみられる。十郎が河の水が濁っており、水波が激しくて渡瀬も見えないようだと述べたのに対して、五郎が、罪人の渡る河というのは濁るものであって、鞠児河こそ三途の大河、箱根の御山は死出の大山、鎌倉殿は琰魔（閻魔）王であるのだと答える。その後に十郎は対岸に渡って「五月雨ニアサ瀬モ見エヌマリコ河浪ニアラソフ我カ涙哉」（巻七）と詠む。ちなみにこの場面は、『舞の本』[5]の「小袖曾我」では、十郎の涙ではなく、伊豆箱根権現による「涙の雨」だと解釈されて、神威を感じさせる趣向になっている。河の濁りを目にした十郎が、水にも心があるのだろうと言ったのを受けて、五郎が伊豆箱根権現の由来を語った上で「権現の哀みて流させ給ふ涙が、涙の雨と成、水の色は濁る也」と述べている。「涙の雨」という表現が使用されているのは注目される。

さて真名本巻九で語られる敵討当夜は、「比ハ五月廿八日の夜半の事ナレハ、雨は居々テ」降るといった状況であったとする。[6]これまで繰り返し語られてきた五月雨の様相が、物語の展開に伴って最高潮にまで達したかのような印象を与える。

さらに興味深いのは、敵討事件後、虎御前が曽我兄弟の母親と一緒に、彼らの供養のために箱根を訪れる場面である。真名本巻十では、曽我兄弟の百箇日の法要のために箱根を訪れたのは九月上旬のことだとする。虎御前と曽我兄弟の母親は、十郎と五郎が辿った足跡をなぞって悲嘆の涙に暮れながら箱根へと歩を進める。その途次に虎御前は「時雨トソ山ノ梢ニソ、キケルヒマナクモルル我カ涙ナミタニハ」と時雨と涙とを重ね合わせた歌を詠んでいる。このように、箱根への訪問に絡む部分では終始「涙」や「泣く行為」とともに物語が進行する。箱根で、五郎が幼い頃に過ごした部屋に案内されたときの場面では、「比は九月上の八日の事ナレは、四一方の山一邊も薮シテ、染ムルかと袖の涙に打一見エテ、経ル世を事は苦キに、安クモ過ル初ウ霜」[7]というように、涙を時雨の季節に同化させて叙述する。虎はこの時に、箱根の別当行実のもとで出家を遂げて「禅修比丘尼」と名のる

ことになる。

一方で鎌倉時代の史書とされる『吾妻鏡』[8]建久四年六月十八日条には、「亡夫三七日」にあたるこの日に、虎御前が出家したとする。虎御前は、箱根の別当行実のもとで仏事を修して、十郎から形見として与えられていた馬を唱導の施物として奉納したという。そして出家を遂げた十九歳の虎は信濃国の善光寺へ向かったと記載されている。

虎の出家を九月のことだとする真名本の描写は、時雨の季節に涙の雨に包まれる虎御前達を印象づけるのに功を奏している。[9]真名本『曽我物語』では、虎御前をはじめとした登場人物の心情を、五月雨や時雨といった季節の雨と連繋させることで、物語における印象的な場面をより強調した形で伝えることに成功したと言える。[10]

二　虎が雨について

五月雨の時期が曽我兄弟の敵討事件や、それに伴う虎御前の悲哀を想起させる契機となっていたことは、近世の資料から知られる。例えば『毛吹草』[11]の「五月」の項には、「曽我兄弟夜討」と「虎が泪の雨」が挙げられており、『日次紀事』[12]「五月二十八日（節序）」にも「虎御前涙　毎年今日多ク雨フル俗謂今日大磯虎娘與曾我祐成相別涙變爲レ雨故今雨虎御前涙也」との記述がみられる。『滑稽雑談』[13]も同様に「虎涙雨　世俗に、五月廿八日にふる雨を、虎が涙と稱す、是大磯の遊君虎御前が事也」として虎御前が流す涙であるという話を載せるが、これは附会の説であると評している。

また小林一茶の句にも「五月廿八日」「とらが雨など輕んじてぬれにけり」[14]とあり、滝沢（曲亭）馬琴の『壬戌羈旅漫録』[15]では、「大磯や虎が雨ふる頃に来て鳴たつ沢の秋にかへれり」と、「虎が雨」を大磯の地と関連させて使用する。そして歌川広重の『東海道五十三次』[16]の大磯の場面においては、「虎が雨」に降られる人々の様子が描かれる。このように近世において「虎が雨」が普及した理由を『江戸文学俗信辞典』[17]では「歌舞伎狂言」によるものと推察している。

さて従来の「虎が雨」についての研究では、主に民俗学的な見地から、田植の行事や御霊信仰と関わるものとして指摘されてきた。

「虎が雨」について調査された大藤時彦氏[18]は、討入りの日が本来「田植の行事と関係深い日であった」がゆえに、曽我兄弟の伝承と雨とが結びつけられていったものであろうと指摘する。それゆえ五月二十八日に降る雨は「曽我の雨」と呼ばれることもある。大藤氏によると、この日に降る雨に関しては、十郎の討死を受けた虎御前の涙の雨だというものと、討入り当夜に雨が降ったために曽我兄弟が首尾よく本望を達することができたので必ず雨が降るのだというものの二つに分類できるという。そして、必ず雨が降るとの伝承は、反面に雨の降ることを願ったことを意味しているのだと考察される。

また『日本民俗大辞典』の大島建彦氏[19]の説明によれば、「一般に五月から六月にかけては、田植えのための水が求められるとともに、疫病や災害のたぐいもおこりやすく、何か恐ろしい御霊の祟りが、その間の降雨の伝承と結びつけられがちであった。特に曽我兄弟の

仇討ちがもてはやされて、その御霊の祟りが恐れられることによって、この虎が雨の伝承ができ上がったとみられる」とする。大島氏[20]はまた、「ほかでもない五月二十八日に、しかも雨のなかで敵討をしたといふのは、やはり曽我の御霊化と関係してくるやうである」とし、「四季を通じてみれば、夏を中心とした祭りや行事には、御霊系統の信仰が、もつとも著しくなつてゐる。とくに五月の行事には、水を要する田植との関聯で、さういふ要素が多く含まれたと言つてよい」と御霊信仰との関わりを重視する。

同様に塚崎進氏[21]も、「早苗の稲虫を怖れ、物忌の続くのも此五月が一番多いのであるが、此季節に祟りのはげしい曾我兄弟の死んだ印象は意外に強かつたに違いない。そしてこの日は、奇しくも虎の涙雨の祭日であり、虎及び兄弟が祀られる。田植時の雨の欲しい要求からとも見られるのだ」と指摘する。また、「『虎が雨』と言う伝説も雨乞に何か関係深いようである」として、信州上水内（かみみのち）郡古里村大字駒沢の「虎が石」の例に着目する。この虎が石については、柳田国男氏[22]も「虎ヶ石一名虎御前の石」として挙げているもので、「雨乞の祈願に霊験ある霊石で、いよいよ雨降らんとする時には石の重さ十倍す」ということから、「石占に用いられた石」であるとされている。

この他に雨と関連づけられる虎御前伝承を持つものとしては、長野市と上水内郡牟礼村の境（長野市大字若槻東条）をなす「三登（みと）山（やま）」の頂にある、「旱魃の時、雨乞いをすると雨が降ると伝える（長野県町村誌[23]）」という虎御前の塚が挙げられる。また大分県下毛郡本耶馬渓町の、「虎御前の墓にさわると雨が降る」（『本耶麻渓村誌[24]』）という伝承も、虎御前と降雨との関連性を示すものとなっている。

郡司正勝氏[25]は、五月二十八日は「田植の神事を行うために、神の恵みの標（しる）しの雨が欲しかった日でもあった」とし、お田植神事に携わる女性について、「雨を呼ぶ霊力は、笠を着けた遊女にある」と述べる。そうして「兄弟の討入りの日に雨を降らせて、兄弟の姿を暗（くら）ませ守ったのも大磯の虎という遊女の、この日の霊力だったということになる」と指摘する。

こうした従来の研究成果から、五月二十八日には田植のための雨が求められたことが知られる。そのため、「虎が雨」は雨乞いに関係があるのではないかと考えられてきた。以上のような先学による指摘を考慮に入れると、虎御前が雨を呼ぶことに関する能力を兼ね備えている人物だと考えられるような何らかの根拠があったと推察できる。

三　雨乞いと虎

雨によそえて涙を流した人々や、祈雨にまつわる伝承を残した女性は少なくないにもかかわらず、なぜ「虎」と「雨」との語が結びついて、「虎が雨」という表現が生成され、一般に流布したのだろうか。

おそらく、虎御前の像に、龍に対応するものとして認識される「虎」、すなわち風雲を巻き起こす存在としての「虎」のイメージが

投影されていたからではないか。

真名本『曽我物語』(巻五)によると、平塚宿の遊女夜叉王を母とする彼女は、寅の年、寅の日、寅の時に生まれたので三虎御前といい、その容貌の美しさゆえに大磯の宿の長者にもらい受けられて養育されることになる。

この虎御前の名は動物の虎にも通ずるため[26]、中国や朝鮮半島といった大陸からの影響関係も視野に入れて検討する必要がある。室町期の紀行文である『廻国雑記』[27]に、「大磯の宿といへる所はいにしへとらといひける好色のすみける所となん。ある同行にたはぶれに申きかせける」として、「今は又とらふすのへとあれにけり人は昔のおほいその里」という歌が載るように、虎御前の名からは動物の虎が連想されていた。また虎御前にまつわる「虎が石」も動物の虎に関する伝承が下地にあると考えられるため[28]、「虎が雨」についても同様に人々が意識する虎の特質が反映されている可能性が高い。

虎が古来、龍と一対のものとして捉えられていたことは、『易経』[29]にある「雲従竜、風従虎」(雲は竜に連れてわき、風は虎につれて起こる)という表現からも知られる。また『淮南子』[30](巻三・天文訓)にも同様に「虎嘯而谷風至、龍擧而景雲屬」(虎嘯いて谷風至り、龍擧りて景雲屬まり)とあるように、龍虎は風雲を巻き起こす存在として認識されていた。

中世の日本においてもこうした思想が定着していたことは、『塵袋』[31]の記述から知られる。龍に関しては「春ノ徳ハ雨也。草木等ヲ生ズル源ナリ。龍ハ雨ヲツカサドル故也」とあり、虎については「秋ノ徳ハ風也」「虎ハ又風ノ主也。虎ウソブキテ風オコルト云フ、本文アキラカ也」と説明される。やはり雲とともに在る龍は雨を制御し、虎は風を起こすものだと信じられていたことが分かる。

龍虎の対決を主題とする謡曲『龍虎』[32]でも、龍の登場場面は、「あれあれ嶺より雲起り、あれあれ嶺より雲起り、俄かに降り来る雨の音、鳴神稲妻天地に輝く光のうちに、現はれ出づる、金龍の勢ひ、遙かによそめも肝を消し、身の毛もよだつばかりなり」と語られる。一方の虎については「かくて黒雲竹林に覆ひ、覆ひかかると見えつるが、竹林の巌洞に籠れる虎の、現はれ出づれば岩屋の内より悪風を吹き出だし、一方に雲を、吹き返し、敵を追風に勢ひ勇む。恐ろしかりける、気色かな」と表わされる。龍虎が対峙して緊迫する様子を伝えるこの描写は、人智を超越する両者の猛威や神秘性が自然現象を左右するとして人々に認識されていたことを示している。

こうした風を起こすイメージを備える「虎」に、大磯の虎御前が重ねられていく過程は、謡曲『伏木曾我』[33]の「人の譽は大磯の。虎のうそぶく松の風」といった表現からも知られる。

龍と虎との関係性はまた、雨乞いの場面においても表出する。先に挙げた『塵袋』の「雩ニ鼓ヲウツ事ハ今案カ、所見アルカ」という項目には「龍神ヲオドロカス心ナルベシ」とあり、雨を呼ぶためには「自三靴一鞭一至二祝一固二」の打楽器を雷鳴のように乱打するのだという。ここで「祝固」とあるのは「祝敔」とも書き、「敔」は「カタチトラノフセルガ如シ」と説明される[34]。おそらく祈

雨に効果をなすものとして、龍を刺激する虎を持ち出したのであろう。この「敔」が古くから大陸で雨乞いに使用されていたことは、『礼記』[35]からも知られる。「仲夏の月」には「命二樂師一脩二鞀鞞鼓一、均二琴瑟・管簫一、執二干戚・戈羽一、調二竽笙・笛簧一、飭二鐘磬・柷敔一。命二有司一爲レ民祈二祀山川・百源一、大雩レ帝用二盛樂一」（樂師に命じて鞀鞞の鼓を脩め、琴瑟・管簫を均しくし、干戚・戈羽を執り、竽笙・笛簧を調べ、鐘磬・柷敔を飭へしむ。有司に命じて民の爲に山川・百源を祈祀し、大いに帝に雩するに盛樂を用ふ）といったように、楽器を用いた雨乞いが盛大に行われていた。

この他にも、祈雨の儀式の際に虎の頭を水中に入れるという手法もあったようで、高谷重夫氏[36]は、「宋の蘇軾の詩『伏竜行』の序に、徐州の石潭に竜がすみ、ここに虎の頭を投げ入れると雷雨があるとあり、蘇軾もここに祈ったことがある」と紹介する。また時代は下るが、依田千百子氏[37]によると朝鮮半島においても雨乞いの儀式の際に虎の頭を水中に沈めたという。さらに平木實氏[38]による十七～十八世紀の朝鮮王朝における祈雨祭についての研究では、祭祀の成果が一度で得られない場合は何度か繰り返し行い、その際に「首都の漢江の畔および揚津の祈雨祭では、虎の頭を沈める行事があった」という。事態が切迫した局面において、虎の頭を投入するという手段は用いられていた。日本においても同様の事例のあったことは、高谷氏（前掲書）の調査によって知られる[39]。

このように「虎」は龍との対応関係から、雨乞いに効験がある動物だと認識されていた。そうした「虎」の像が根底にあったために、「虎」の名を冠した虎御前が雨を呼び寄せることに対して説得力を持ったのだと考えられる。

結びに

五月二十八日の雨を「虎が涙」と表現する例として、近松門左衛門の作品の「頃しも五月二十八日、空さみだるゝ黄昏の、虎が涙や少將の、夜の雨さへ頻りなるに」（『百日曾我』[40]）や、「ヤア虎が涙のしるしが見えて、空が曇つた。五月二十八日、雨三粒でも降らねばおかぬ。嬶や子供が不動参り、気の毒や、雨にあはう」（『心中刃は氷の朔日』[41]）などが挙げられる。特に後者は、この日に雨が降ることへの確信すら感じさせる。

興味深いのは『曾我会稽山』[42]では「雨を降らせる」ことに意識が向けられる点である。雨が三粒でも降れば頼朝が狩場から鎌倉へ帰るのを延期するらしいと聞いて、虎御前達が雨乞いをする場面が設けられている。祈雨が功を奏して、「諸天も感応あやまたず．晴天忽ち常闇と、虚空にひらめく稲光り．足高山に雲おほひ．涙の雨をさそひ来て．俄に降りくる雨の足、篠を．乱すがごとくなり」と雨が降ったので、曽我兄弟は無事に敵を討つことができたのだという。それゆえに、「五月二十八日に．今の世までも降る雨を．虎が涙や、せうしやうの夜の．雨」ということで名高いのだとする。この近松の『曾我会稽山』の筋立てを借りて作られた草双紙の題が『夜雨虎少将念力』[43]となっているように、雨乞いは敵討の成功を左右する重要な鍵として受容されていく。虎御前を中心とした祈雨

は、敵討成就へ導くための切実な行為として捉えられていったことであろう。

以上のように、動物の「虎」が降雨に関わってきた歴史的経緯が、「虎」御前が雨を呼ぶといった伝承に投影されたのではないかと想定できる。また真名本『曽我物語』において、虎御前が流した涙が季節的な雨と連動する形で語られてきたことも、「虎」と「雨」とを強く結びつける動機となって作用したと考えられる。

注1　真名本の引用は『妙本寺本曾我物語』(貴重古典籍叢刊　角川源義 角川書店　一九六九年三月)に拠った。なお引用するにあたり、便宜上私に通行字体に改めたり、符号などを省略あるいは付加したりしたところがある。

2　「引歌より見た『源氏物語』とその注釈――『休聞抄』を中心に――」文學研究第九十八号　九州大学大学院人文科学研究院　二〇〇一年三月。『古今和歌集』には「泣く涙雨と降らなむ渡り川水まさりなば帰りくるがに」(哀傷歌・八二九・小野篁)や「墨染めの君が袂は雲なれや絶えず涙の雨とのみ降る」(哀傷歌・八四三・壬生忠岑)などの歌に、涙と雨の関連性が読み取れる。『うつほ物語』にも「涙雨のごとく降らしたまふ」(藏開中)(新編日本古典文学全集一五　中野幸一校注・訳　小学館　二〇〇三年七月〔二〇〇一年五月第一版第一刷〕)という表現がみえる。

3　新編日本古典文学全集二六所収　藤岡忠美　中野幸一　犬養廉　石井文夫校注・訳　二〇〇八年十二月(一九九四年九月第一版第一刷)。またこの『和泉式部日記』における雨の表現について、大隈博子氏は「雨は式部の恋愛感情を左右する原因の一つであり、それはまた式部日記の感情の変化、描写の原動力の一つであった」と指摘する(『平安朝文学における雨』春椎潟第十三号　一九六七年八月)。なお、臼田昭吾氏によって「五月に降る長雨」に限定された意の「五月雨」が新たに登場するのは『古今』の撰者時代の頃のことであると指摘されている(「『五月雨』素材歌の成立とその展開――平安期和歌史の一側面――」文経論叢第二二巻第三号人文学科篇Ⅶ　弘前大学人文学部　一九八七年)。また小澤恵里奈氏は、散文作品での五月雨の使用法について、和歌と同じく、鬱屈とした心情に結び付くか、「雨」と同じく「つれづれ」を感じるもの、忌月のために結婚できない時期を指す言葉として使われているものが確認できるとする(『枕草子』「五月の御精進のほど」における「雨」の表現――郭公探訪の表現と構成意図を巡って――」『日本文芸論叢』第二四号　二〇一五年三月)。真名本『曽我物語』で十郎と虎御前が曽我で最後の別れをしたのも婚姻が忌まれた五月雨の時期にあたることを考慮に入れると、その後の展開を暗示する伏線のようにも思える(五月雨と婚姻については『源氏物語』〔日本古典文学大系一五　山岸徳平校注　岩波書店　一九六四年十月(一九五九年十一月第一刷)〕の蛍巻の補注を参照した)。

4　新編日本古典文学全集四三　峯村文人校注・訳　小学館　二〇〇六年八月(一九九五年五月第一版第一刷)

5　新日本古典文学大系五九　麻原美子　北原保雄校注　岩波書店　一九九四年七月

6　上原輝男氏は、五月二十八日が大阪住吉社のお田植祭の日でもあることを指摘し、この日に稲作行事と関わる禊・祓があったとする。また、「曽我兄弟復讐事件が、日本人の印象に深い陰翳を刻み込んで行くのは、季節の雨、つまり〝曽我の雨、虎の雨〟と成語にまでなった梅雨前線が然らしめている」と考察する(『曽我の雨・牛若の衣装――心意伝承の残像――』暮しの手帖社編集　二〇〇六年十一月)。

7　当該表現が『新古今集』の「世に経るは苦しきものを槙の屋にやすくも過ぐる初時雨かな」(冬歌・五九〇・二条院讃岐)に拠っていることは『真名本曾我物語』(笹川祥生　信太周　高橋喜一編　福田晃解説　東洋文庫四八六　平凡社　一九九六年五月〔一九八八年六月初版第一刷〕)の注で指摘されている。

8　『新編増補』國史大系　吾妻鏡』第二　黒板勝美　國史大系編集會　吉川弘文館　一九七二年八月

9　時雨を恋の涙に喩えることは、今井源衛氏によって『後撰集』や『拾遺集』の頃から広く一般化したのではないかと指摘されている（『大和物語評釈上巻』笠間注釈叢刊二七　笠間書院　一九九九年三月）。

10　坂井孝一氏は真名本『曽我物語』の敵討場面における雨の描写は虚構ではないかと指摘する（『曽我物語の史実と虚構』歴史文化ライブラリー一〇七　吉川弘文館　二〇〇〇年十二月）。氏は、六月に幕府が祈雨法の実施を寺社に命じた記事が『吾妻鏡』に載ることや、「頼朝将軍記」の時代に「祈雨法」が五月から六月に実施されたことが貴族の日記等から知られることを根拠に、曽我兄弟の敵討が行われた年は日照り続きであったのではないかとする。そして、「〈曽我の雨〉は史実としては甚だ疑わしいものである」とし、『吾妻鏡』建久四年五月二十八日条や真名本『曽我物語』の原史料となった原初的な「曽我」の物語に見られる雨の描写は、筥王元服の際の「甚雨」のように、「〈十番切り〉の舞台設定を劇的に盛り上げるための虚構、もしくは誇張であった可能性が高い」と考察される。

この説は、坂井孝一氏と大川信子氏と村上美登志氏の鼎談においても話題となっている。坂井氏は、「雨の中での戦い」は、劇的な効果を盛り上げるにはうってつけであり、「そういう方向で、人びとが望むような何らかの虚構、舞台設定が物語の中で行われているように」みえると発言する。また大川氏は、「事件当夜の天候が実際のところどうだったのかはともかくとして、物語が『雨が降っていた』と描いたことの意味を考えてみると、劇的効果の可能性に加え、御霊信仰のことも背景にあるのでしょうか。『吾妻鏡』五郎元服時の雨にしても、敵討ち当夜の雨にしても、何か兄弟と雨との関わりが思われ、兄弟が雨を招き寄せる吸引力を持っているという印象も持ちました」と語る（『鼎談　曽我物語の作品宇宙』『曽我物語の作品宇宙』〔国文学解釈と鑑賞別冊〕村上美登志編　至文堂　二〇〇三年一月）。確かに雨や風などの現象が、曽我兄弟の動向に連動していることは注目される。想起されるのは『地蔵菩薩霊験記』の、善光寺へ参詣する法師がある宿の女性（実は虎御前）に泊めてほしいと願ったところ、修羅道で戦い続ける曽我兄弟の魂霊が現れたという話である。「俄ニ雨風吹来。四方山震動シテ電光頻ニ閃キテ」といった状況の後、雨が止んで風が静まったところで、松明と血のついた太刀を持った十郎と五郎の魂霊が登場するといった設定になっている（『續群書類従』〔第二五輯下　釈家部〕塙保己一編　平文社　一九八四年十二月〔一九二四年八月発行〕）。

さらに曽我兄弟と雨との密接な関わりは、降雨を期待させるものでもあったと考えられる。というのも、『申楽談義』の永正十一（一五一四）年十月二十八日の「南都雨悦（アマヨロビ）ビノ能ノコト」として「（二番）元服曾我（ゾウガ）」の名がみえるからである。『世阿弥　禅竹』（日本思想大系）の補注でこれは「雨悦ビノ能」（降雨を感謝して神仏に奉納する能）だとされているが、演じられた能が脇能の『矢立賀茂』を初め、『隅田川』『宰府（藍染川）』、『藤戸』『杜若』『猿沢（采女）』などの、水に縁ある能が多い事から、正しくは「祈雨願能」であったことが指摘されている。祈雨のための演目として『元服曾我』も認知されていたと想定できる（『世阿弥　禅竹』日本思想大系二四　表章、加藤周一校注　岩波書店　一九七四年四月）。

11　松江重頼『初印本　毛吹草　影印篇』加藤定彦編　ゆまに書房　一九七八年五月

12　『京都叢書』第二巻　京都叢書刊行会　一九三四年六月

13　『滑稽雑談』第一巻　四時堂其諺　ゆまに書房　一九七八年十二月

14　『蕪村集　一茶集』日本古典文学大系五八　暉峻康隆　川島つゆ校注　岩波書店　一九七二年十一月（一九五九年四月第一刷）

15　『日本随筆大成』（第一期第一巻）日本随筆大成編輯部　吉川弘文館　一九七五年三月

16　『天保懐宝道中図で辿る広重の東海道五拾三次旅景色』古地図ライブラリー5　堀晃明　人文社　二〇〇三年四月（一九九七年四月）

17　石川一郎編　東京堂出版　一九八九年七月。ちなみに本書によれば「虎が雨玉屋鍵屋はもらひ泣」といったように、虎が雨と花火の川柳があるのは、「両国の川開きが五月二十八日の曽我祭に当たっているから」だという。

18　『日本民俗学の研究』學生社　一九七九年二月

19　福田アジオほか編　吉川弘文館　二〇〇〇年九月
20　「『曽我物語』の形成」『国語と国文学』一九六〇年四月
21　「曽我物語伝承論」『日本文学研究大成　義経記・曽我物語』村上学編　国書刊行会　一九九三年五月
22　「老女化石譚」『妹の力』角川ソフィア文庫　角川学芸出版　二〇一三年七月（一九七一年五月〔改版初版〕）
23　『長野県の地名』日本歴史地名大系第二〇巻　平凡社　一九九三年一月（一九七九年十一月初版第一刷）
24　『日本伝説大系』第十三巻　北九州編　荒木博之編　みずうみ書房　一九八七年三月
25　『FRONT』六月号　リバーフロント整備センター　プラス・エム株式会社　一九九〇年。郡司氏は、「田植どきに雨がなくては、雨乞をしなければならなかったかつての日本では、雨脚を着けた笠を冠り、蓑を着、鉦や太鼓で雷電を呼び、『雨たもれ、龍王神』と、日照りのなかを踊った。天はそれに感応して雨を降らすので、雨が降るから蓑笠を着けるのではない」とも指摘する。
26　大場磐雄氏は、『日本書紀』皇極天皇四年条における、鞍作得志が虎を友として幻術を学んだという記事を挙げて、「虎の名をもつものが仙術を学び、巫女たる資格をもつと考えることも可能であろう」と指摘する（『十二支と十二獣』北隆館　一九九六年十月）。また虎御前の名に関しては、拙稿（櫻井衣里子「真名本『曽我物語』研究――大磯の「虎」発生に関する一考察――」『國文』第九五号　お茶の水女子大学国語国文学会　二〇〇一年八月）でも考察を行った。
27　『群書類従』第十八輯　日記部・紀行部　塙保己一編　平文社　一九八七年三月（一九三二年十月発行）
28　拙稿「「トラ・寅・虎」の多様性――『曽我物語』の虎御前に関する一考察――」『成蹊國文』第四八号　二〇一五年三月
29　『書経・易経（抄）』中国古典文学大系　赤塚忠訳　平凡社　一九七二年六月
30　新釈漢文大系第五四巻　楠山春樹　明治書院　二〇〇四年十二月（一九七九年初版）
31　『塵袋1』大西晴隆・木村紀子校注　東洋文庫七二三　平凡社　二〇〇四年二月。また『禁秘鈔』（『群書類従』第二十六輯　塙保己一編　平文社　一九八七年六月〔一九三二年十月発行〕）の「祈雨」の項に「又陰陽師奉二仕五龍祭一。或於二神泉一祭レ之。一名二雩祭一。」とあるように、祈雨の儀式は「雩祭」と呼ばれていた。その他、雨乞い関連の資料としては、『禁秘抄考註　拾芥抄』（〔増補新訂〕故実叢書）故実叢書編集部編　明治図書出版　吉川弘文館　一九五二年七月）、『續群書類従』（第二五輯下　釈家部）塙保己一編　平文社　一九八四年十二月（一九二四年八月発行）所載の「祈雨日記」などを参照した。
32　『新装愛蔵版　解註謡曲全集』巻六　野上豊一郎編　中央公論社　一九八五年二月
33　『謡曲三百五十番集』日本名著全集江戸文藝之部第二十九巻　日本名著全集刊行会　一九二八年五月
34　岸邊成雄氏によると、この祝・敌などの「古代支那楽器」は、中国の東周の時代には揃ったという（『東洋の樂器とその歴史』アジア学叢書一七三　大空社　二〇〇七年九月）。
35　『礼記（上）』新釈漢文大系第二七巻　竹内照夫　明治書院　一九八一年九月（一九七一年四月初版）
36　『雨乞習俗の研究』法政大学出版局　一九八二年三月。『蘇軾』（下）
37　『中国詩人選集』第二集　小川環樹注　岩波書店　一九六二年十二月
38　『朝鮮の王権と神話伝承』勉誠出版　二〇〇七年二月
39　『韓国・朝鮮社会文化史と東アジア』学術叢書　学術出版会　二〇一一年十月
　高谷氏によると福岡県の『遠賀郡誌』（上巻）の嘉永六（一八五三）年の記録には、旱魃に「御虎の頭淵に沈申候はば降雨有之よし」というので、遠賀・鞍手両郡ではこれを藩より借りて祈ったとあり、また下上津村でも借り出して畑村の音滝の滝壺に沈めて雨を祈ったという。そして「虎の頭の話は対馬でも聞くところ」であって、上県郡の瀬田では「虎頭淵」に虎の頭を沈めて雨乞いをすれば必ず効験があると『新対馬島誌』

に載ると紹介する。この風習は、朝鮮と最も交渉の深かった対馬を通じて九州に流入したものであろうと高谷氏は推察する。

40 『近松門左衛門集上』近代日本文學大系第六巻　國民圖書株式會社　一九二七年二月

41 『近松門左衛門集②』新編日本古典文学全集七五　鳥越文蔵　山根為雄　長友千代治　大橋正叙　阪口弘之校注・訳　小学館　二〇〇三年七月（一九九八年五月第一版第一刷）

42 『近松門左衛門集③』新編日本古典文学全集七六　鳥越文蔵　山根為雄　長友千代治　大橋正叙　阪口弘之校注・訳　小学館　二〇〇六年八月（二〇〇〇年十月第一版第一刷）

43 『草双紙』岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編〉第六巻　財団法人東洋文庫日本古典文学会監修・編集　貴重本刊行会刊行　一九七四年七月

（しんむら・えりこ　本学非常勤講師）